

青峰同窓会 会報

2004年号



目次

1	会長挨拶	2
2	同窓生からの便り	
2-1	高専を卒業し…若林 直樹 (61E卒)	2
2-2	マレーシアより…リザル (08C卒)	4
3	退職教職員	5
4	学科近況	
4-1	一般科目の近況	8
4-2	機械工学科の近況	8
4-3	電気電子工学科の近況	9
4-4	電子情報工学科の近況	10
4-5	生物応用化学学科の近況	11
4-6	材料工学科の近況	12
5	三重県内初! 鈴鹿高専の教育が JABEEから認定される!!	13
6	「校友」制度発足	14
7	SHTNに参加してみませんか?	15
8	会計報告	16
9	編集後記	16

会長挨拶

青峰同窓会会長 小手川 智 (42C卒)

今年の夏は酷暑となり、とりわけすごしくい夏でした。アテネ五輪での日本選手の大活躍もあって、気候も暑く心も熱くなった夏でした。同窓会員の皆様におかれましては、お変わりなくお過ごしのことと存じます。今年度の会報をお届けします。

挨拶文を書いている時に、同級生、後輩、教職員の方々のことが懐かしく思い出されます。会報は母校の近況を知る数少ない情報源のひとつであり、その意義の大きさを感じております。現在母校に教官としておられるOBの皆様の尽力のお陰をもって発行しております。ありがたく感謝する次第です。

情報源としては母校のホームページをご覧ください。

私も時折アクセスしております。後輩たちのクラブ活動の報告など写真入で見ることが出来ます。私はW・V部に所属しておりましたので、山の写真を見ると当時の自分の姿とだぶらせて、ワクワク、ドキドキしてしまいます。結構楽しめます。

最後になりましたが、同窓会員の皆様のご健康とご多忙を祈念してご挨拶とします。



同窓生からの便り

高専を卒業し 若林 直樹(61E卒)

昭和61年春に高専を卒業し、今年で39歳になることを思うと、一般的なペースで考えて既に社会人生活の半分くらいまで来ている自分であるのかと思います。こうして卒業生としての近況記事の執筆依頼を受けてみると、20歳代、30歳代の月日は飛ぶように過ぎ去ってしまい、毎年、時間の流れが加速していることを改めて感じます。

私は現在、アメリカのデトロイト近郊に住んでおります。高専を卒業と同時に当時のKDD(国際電信電話)に入社し、今ではKDDIになりましたが、最初に神奈川県の実業所、その後、東京の本社開発部門、国内グループ事業、現在の海外勤務(北米)と、これまで主に4つの部門を渡り歩いて来ました。現在の仕事は、北米自動車業者への通信及びITサービスの提供で、新拠点立ち上げのための市場開拓をしております。こちらアメリカへは昨年11月に赴任し、最初はマンハッタン勤務でセントラルパーク近郊に住んでいましたが、今年4月より日系の自動車メーカー等への対応のためKDDIが新拠点をつくることとなり、家具が買い揃った頃にニューヨークから引っ越して来ました。海外勤務は初めてですが、25歳の頃約1年間、留学(ニューヨーク州西部)をさ

せて頂いた経験があるため、海外在住としては一応、今回が2回目になります。国内勤務の期間にも海外出張は何十回としており、どちらかと言えば海外慣れしている方なのですが、それでも、現地人同士の会話には着いていけないことがしばしばあります。

20代後半から30代の初め頃までは、自分も技術者として特に先端分野の仕事や社内で注目を得ているようなプロジェクトに興味を持っていましたが、約4年前に管理職となり、グループや部署を見ながら大分、サラリーマンとしての価値観も変わってきたように思います。組織の中で一芸に秀でた人材も必要ですが、今はどちらかと言うと、営業であろうがゴミ拾いであろうが時には喧嘩の仲介であっても、どんな役割でも効率よく処理できる人材が会社員としては最も有益ではないかと思っています。これは、これまで自分が通過してきた環境によるものかも知れません。私のいる会社も入社当時頃は、任用に学歴、学閥といったものが色濃く出ている組織でしたが、今はそういった風潮がほとんど取り去られた環境にあります。他企業でも同様の傾向にあり、時代の流れによるものでしょうが、過去に高専を卒業された諸先輩方の実績

の積み重ねや見えない基盤にもよるところも大きいのではと思っています。一方で今の自分自身はというと、これまで運や環境にも恵まれてやってきた方かも知れませんが、年と共に競争欲も薄れ、かなりマイペースとなってきたことを感じます。ただし海外支店の拠点長として、半年間で市場の見通しがつけば拠点拡大、そうでなければ撤退という条件を突きつけられている立場にあります。

日本人の海外生活というのは色々なパターンがあると思いますが、北米の場合、ちょっとした都市部であれば必ず日本食レストランや食材店があり、また、日本のテレビ番組も国内に専用サーバを設置すれば、全てネットでダウンロードしての視聴が可能となっているため、比較的不自由のない生活が出来ると言えます。気候については昨年のニューヨークはとても寒かったのですが、ここデトロイト近郊も北米の中では避暑地としての位置付けであり、冬の寒さはマンハッタン以上であると聞いているので少し恐れています。日本にいるときはほとんど都内勤務であり、特に結婚後は自家用車を持っていなかったのですが、こちらに来て車は生活の必需品となり、家内の分と2台購入しました。2台とも中古なのですが、こちらは特に日本車は中古車の価値が下がらず、人気があります。一台はホンダの海外仕様のアコードクーペでとても気に入っています。もう一台は雪を意識し、小型のSUVであるランドビターラ(Suzuki/エクスト)にしました。小型と言ってもV6 2.5リットルでアメ車並みに燃料を消費するのが玉に瑕ですが、トルクはそこそこあるのでまあまあと言ったところですか。こちらのガス代はハイオクでもガロンあたり2ドル前後で、日本と比べると約3分の1程度ですが、その反面、土地が広く毎月の走行距離は長いので、結局、車の維持費は変わりません。

最近、せっかくアメリカに来たということで、20代の頃には絶対やりたくなかったゴルフを始めました。何回か打ちっぱなしで練習して、先日、ミシガンのトヨタ会というのがあり、初めてコースに出てきましたが、スコアは129で順位は106人中、97番目でした。空振りや他人のボールを間違えて打つといった初心者のミスがなかったら、もう少し良かったかも知れないのですが、後ろにも人がいたのでまあよかったかという



ところですか。その時はドライバーのあたりが良く常時300ヤード近く飛んでいたもので、初心者ながらこいつは才能があると、はやしたてられたりしましたが、ここ1-2週間、ウッドで全く玉が上がりなくなりやる気がうせています。現在住んでいるアパート前にもコースがあり、そこは夕方に行くとなった10ドルにてハーフのプレイが可能なので、こちらにいる間は少し練習するつもりです。また、これから訪れる長い冬には雪ばかりで、高専卒業前に一回しかやったことのない、スキーもやることになりそうです。ミシガンはあまり斜面がないとのことなので、若手にスノーブレードでも教えてもらおうかと思っています。

車で約30分のところにあるデトロイトタイガースの球場に、先日もマリナーズのイチローが来て大活躍し、地元の日本人の間では盛り上がっています。同じ日本人でも米国に乗り込み、華々しい人生を送る人もいるものだと思います。今後、自分もそのまま行けば社会人としての残りの半生を過ごすわけですが、5年後、10年後はどういった生活をしているのか分かりません。仕事と余暇のバリエーションで多少なりともメリハリのある生活をして、自分なりのテンションを保てるように頑張りたいところです。米国中西部の仕事では今後、同窓生の先輩、後輩などにお会いすることもあるかも知れません。その時は、母校の昔や今について語り合いたいと思います。



マレーシアより リザル(08C卒)

皆様今日は、1996年に鈴鹿高専工業化学科を卒業しましたワン・ムハマド・リザル・ビン・ワン・イドリスです。高専の時には、リザルとよく呼ばれていました。今回、今年の鈴鹿高専の同窓会報に掲載する原稿の依頼を頂きまして本当に嬉しく思いました。ありがとうございます。

私は1992年10月にマレーシアから来日し、東京の日本語学校で日本語をはじめて習い出し、1993年4月に鈴鹿高専に入学しました。それから三年間、鈴鹿高専の留学生として、寮生活を送りました。三年の間には、楽しいことや、悲しいこともあり、今ではとても懐かしい思い出になり、先生方や同級生の友達などに感謝の気持ちで一杯です。工業化学科での3年生から5年生までの三年間、とてもいい友達がたくさん作れました。皆様とはほぼ8年ぶりになりますが、皆様それぞれの人生を歩んでいるかと思えます。そこで、皆様の情報を聞く前に、はじめに私のほうから、高専卒業後の私の生活の話を見せて頂きます。

1996年3月に高専を卒業して、私は一旦マレーシアに帰りました。就職は卒業をする前に決まったので、滋賀県の日電マシナリ株式会社(NEC)に面接に行き、合格の通知を受けたので5月にもう一度日本に戻りました。AOTS研修者として、東京研修センター(TKC)に三週間ぐらい通いました。その後、滋賀県のNEC本社に移動して、6ヶ月間ほど研修を受けました。12月に研修が終わり、NECマレーシアで仕事を始めました。一年間ぐらいエンジニアとして電気関係の勉強しました。そして、生産管理で電気の担当者として、会社の製品に係わる電気関係の物品の手配、計画、ベンダーとのやり取りなどをしました。今年で8年目となり、今アシスタントマネージャとして、会社の全体的な計画推進者として、メカニカルと電気系の両方の管理をしています。今の私があるのも、鈴鹿高専の先生方と友人の皆様、に、チャンスとヘルプを頂いたお陰です。本当に心の中から、お礼と感謝の気持ちで一杯です。それから、皆様に色々なご迷惑をお掛けした事もたくさんあ

ったと思いますが、改めてお詫びいたします。皆様には大変お世話になりました。

1998年8月30日に、TKCで出会ったタイ人と結婚をし、現在二人の子供が出来ました。2000年2月17日に生まれた4歳半の女の子と2004年2月10日に生まれた6ヶ月の男の子です。二人とも私に似ているのです。(^ < ^)。写真も付けてありますので、ご覧になって下さいませ。子供が大好きになった私が、これからもいいお父さんになれるように頑張りたいと思います。そして、子供にはもちろん日本語ができるように教えてあげたいです。日本にも勉強に行かせたいし、日本人のいい人々にも出会えるように体験をさせてあげたいと思います。皆様と会う機会があればいいなと思っております。私も大分久しぶりですから。

では、簡単ではありますが、高専卒業後の私の生活の話を見せて頂きました。長くならないように、今回はこの辺で終わらせて頂きたいと思えます。皆様と会う日まで、また宜しくお願ひ申し上げます。



退職教職員

退官にあたって

機械工学科 西谷 正



1976年（昭和51年4月）に、名古屋大学から本校へ転勤し、28年間お世話になりました。教師生活は40年にもなり、いま振り返ってみますと誠に幸福な年月でした。

本校に着任して第一に思ったことは、授業を担当したとき、学生諸君の学力と実力が高いことでした（決して決して、お世辞ではありません）。たいへん喜んだことをはっきり覚えています。第二に、青峰寮の寮監に当たる日が楽しみでした。何故かと言えば、学生諸君との実生活での触れ合いがあり、授業では見えない人間的なことが分かり、親の代理をしている気持ちになることができたことです。クラブ活動では、自動車部の担当を15年間ほど引き受け、鈴鹿サーキットでの消エネ・カーの大会には3回出場できたことです。授業では、幸いにも1学年から5学年までの各学年を担

当させていただき、各学年の諸君と楽しく親しく授業ができたことは誠に幸せ者でした。ありがとうございました。心よりお礼を申し上げます。

卒業研究では、高分子材料の粘弾塑性変形における実験的応力解析、複屈折現象およびクリープ変形に関することを行い、アメリカやイギリスなどへ論文掲載ができたことも望外の喜びです。

定年後には、本校の施設や図書館などを利用していただく計画をしておりますので、暖かい目で見てくださいようお願いいたします。とにかく、鈴鹿高専の学生諸君が勉強での実力、クラブ活動を通じて人間的な実力を身につけ、若い頭脳と能力を大いに成長発展されんことを祈ってやみません。

鈴鹿高専を去るにあたって

電気電子工学科 山口 慎司



昭和41年4月に鈴鹿高専に奉職して以来、38年の歳月が流れ、この3月末日で定年退官することになりました。私は九州の長崎県の出身で、三重県は初めての訪問でしたので、赴任した当時は仕事や生活すべてが新しい体験で、わくわくしながら毎日を夢中で過ごしたことがつい先日のように懐かしく思い出されます。昭和41年は本校の1期生が5年生になった年で、卒業研究が初めて行われた年でありました。私は助手として教授の下で、6名の卒研生のサポートをいたしました。教授も私と同時に赴任された新任で、研究室には研究設備がまったくない状態で、設備を整えながら試行錯誤の連続で卒業研究を行いました。今日のような電卓やパソコンは存在せず、三角関数や対数計算は数表や計算尺で行い、ソロバンをはじめておりました。科学技術の進歩は、社会だけでなく教育現場を大きく変貌させ、まさに隔世の感がいたします。

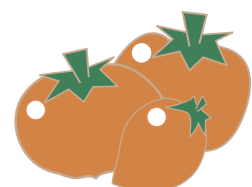
また、電気工学を離れて音楽部の顧問を昭和44年から今日までの35年間務めさせていただいたことが多くの楽しい思い出となっております。三重国体や全国植

樹祭などの国家的行事に参加し、式典音楽を演奏したこと、年に一度の定期演奏会を部員と一緒に盛りに上げたことなどが、その時々演奏した曲とともに頭の中を駆け巡ってまいります。

担任をした学生、卒研生そして音楽部の学生など、この38年間に接した学生との思い出をこれからの日々の活力にしたいと考えております。

最後の10年間は、学生主事、専攻科長そして学科主任として教職員の皆様方のご指導とご鞭撻をいただきましたお蔭で、何とか務めを終えることができましたことに衷心よりお礼申し上げます。

最後に、皆様方のご健勝と鈴鹿高専のますますのご発展を心からお祈り申し上げて、お別れの言葉とさせていただきます。



ご挨拶

電子情報工学科 船戸康幸



平成4年4月より本校にお世話になり、あっという間にご挨拶の時を迎えました。

12年間はまさに「光陰矢の如し」です。本校での皆様方のご支援に、心より感謝申し上げます。思い起こせば高度成長の絶頂期に社会人となり、仕事としての最初の頃は研究、そして教育、更に、教育と研究など、今日まで、いずれもすばらしい環境での恩恵をうけるのみであったと感慨無量です。情報化社会の要請がおおきくなり、鈴鹿高専の電子情報工学科が新設され、その全容がほぼ定まった時期に赴任が来て、大変幸運であったと思います。学生は若くて元気がよく、フレッシュで優秀と感じました。やがて社会の変貌はますます急激となり、コンピュータ性能とその応用の進歩は予想を越えるものでした。先端技術の発展は目覚しく、工学教育のありようも変遷し、その根源はなんだろうかなとも繰り返しの自問でした。

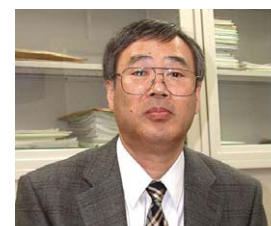
この間、基礎を培う早期において、電子と情報の融合教育が基本と考え続けてきました。しかしながらその手法を繰り返し議論しながらも、実践の難しさを体験してきたのも事実です。15歳-20歳前半における一貫教育は、年次的には一貫でも、だんだん巾が広がって、横には非一貫なのが特徴ではないかと考えます。又、研究の初めは放電開始機構、荷電粒子の磁場閉じ込め、粒子と壁相互作用、そして現在は又混合気体の放電と、ぐるぐる一巡して、何も出来ず仕舞いです。

昨日までの学生へのアドバイスが一転して、今度は自分自身の進路を模索せねばなりません。思えば40年間は良き時代であったと述懐しています。第2ラウンドへのご厚情をまた宜しくお願い致します。

皆様方のご健勝と鈴鹿高専の更なる発展を願い、ご挨拶とさせていただきます。

定年退官を迎えて

生物応用化学科 高橋正博



1963年に鈴鹿高専に採用されて以来41年間、鈴鹿高専一筋で学生の教育と研究に努力し、2004年3月には定年を迎えることになりました。

私が赴任した頃には、建物の一部が完成していた程度で、学生実験をするにも実験設備がほとんど整っておらず実験の準備や雑用に夜遅くまで追われ、ほとんどの時間を使っているような状況の中で、助手は教師ではないとまで言われたことを今でも忘れることができません。幸い研究の出来なかった時期にすばらしい恩師に出会えたことと研究設備の貧弱な所でいかに研究成果を上げるかをバネに勉強し努力した結果、1982年に名古屋大学から工学博士の学位を授与されたことが、つい先日の出来事のように脳裏に浮かんできます。いかに軽率な言葉が相手を傷つけるかを肝に命じて、自分の息子や娘のつもりで若い学生と接し、授業を通して知識・能力を身につける助けができたことは大きな喜びです。

鈴鹿高専での思い出の一つとしてクラブ活動に対する学生支援があります。1965年4月から6年間、ワンダーフォーゲル部の顧問として学生とともに北アルプスの縦走に参加し、山の魅力に取りつかれ、今でも趣味の一つとして山登りを楽しんでいます。また、1971年4月から14年間は、卓球部の顧問として練習試合について行ったこと、高専大会では窓を締め切った暑い体育館の中で英語担当の野村先生と一緒に選手に声援を送っていたことなどを懐かしく思い出します。1985年4月から9年間は、ラグビー部の指導教官として外来コーチの寺前様（故人）・小林様、顧

問の先生と一緒にクラブ

の指導にあたりました。怪我の多いクラブで気の休まるときがなく、事故をいかに防ぐかが課題でした。非常にしんどい思いをしましたが、夏の白馬合宿・菅平合宿、1987年から7年連続で全国大会に出場する機会を与えられ、正月休み返上で選手とともに頑張ったことなど、今では良い思い出の一つになっています。特に、ラグビー部の指導教官を担当した時期の1991年に全国大会10回出場で表彰されたことや1995年に全国大会で群馬高専に勝ち念願の初戦突破を果たしたことが、強く印象に残っています。

鈴鹿高専に勤務できたおかげで、1972年には3ヶ月間沼津高専で、1973年には約1ヶ月間東京の貿易センタービルで情報処理に関する勉強をすることができたこと、1969年には半年間内地研究員として名古屋大学で、1995年には2ヶ月間外地研究員としてカリフォルニア州立大学バークレー校とミネソタ州立大学で勉強する機会が与えられたこと、1999年10月には約2週間オハイオ州立大学に材料工学科の兼松先生と出張する機会を得ることができたことなど、多くの貴重な体験をすることができたことに対して感謝の気持ちで一杯です。4月には、法人化され大変な時期を迎えることとなりますが、鈴鹿高専が益々発展されることを期待しエールを送りたいと思います。

鈴鹿高専を定年退官するにあたり、今まで協力を惜しまず、ご指導いただいた皆様にご心からお礼申し上げます。

お世話になりました42年間 学生課 鈴木満子



平成16年元旦、昭和37年4月鈴鹿高専創設時に公務員生活を始めて以来42回目のお正月を迎えました。この節目の新年を家族全員が揃って迎え、元旦の初詣の際にはあと三ヶ月で定年となる時期まで無事に勤務できたことを感謝してまいりました。これも、創設時から今日までたくさんの学生、教職員の方々のご支援があってと感謝いたしております。私自身何の貢献も残せず過ぎてまいりましたが、42年間の鈴鹿高専の歩みの中で少しでも関わられたこと、何事にも一生懸命が

んばった思いを大切にしていきたいと思っております。

現在、一輪の花の魅力を如何に表現するか、若い人に混じって再勉強を始めた華道を、楽しみながら生涯学習として継続していきたいと考えております。

最後に、42年間お世話になりました鈴鹿高専の益々の発展と教職員、学生の皆さまのご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

長距離列車「高専号」の終着駅を迎えて

会計課 松浦幸代



私が乗車した昭和41年4月始発の長距離列車「高専号」は間もなく終着駅です。山並も斜面も力いっぱい走り、途中でしんどくて下車したいと思った時期もありましたが、悩んだりしながら乗り越え、気が付けばもう終着駅です。

始発での乗車は寮務係で22歳でした。寮務係の事務所は1寮の中にあり、いつも寮生と一緒にでした。行事にも参加し、中でも管理棟前での盆踊りや寮門前からバスで自動車教習所に通ったりした事など仕事や遊びに夢中で過ごした日々は、今でも懐かしく思い出されます。

「高専号」の車窓の外も時代の変化を受け、学生さん達の気質や学校を取り巻く環境も変化してきました。

しかし長距離列車に長年乗車した今、学校を振り返って見ると、卒業生はそれぞれの職場で実力を発揮し、みごとに社会に貢献してみえます。この現状を見る限り外見は変わっても今の学生さん達の本質は、確かに先輩から受け継がれていると確信し、嬉しく思います。お世辞抜きで鈴鹿高専は胸を張って自慢出来る学校です。平成16年度から独立行政法人国立鈴鹿工業高等専門学校機構として、始発から列車は大きな夢を載せ走り出すことでしょう。

私が終着駅まで乗車出来ました事は、教職員皆様のご指導の賜物と感謝致しております。本当に有難うございました。

定年退職にあたって

学生課 南部佳代



長い年月を勤めさせていただいた鈴鹿高専ともいよいよお別れの時がまいりました。本が好き、読書が好きという思いがあったものですから、図書館に勤務できるということで、鳥羽商船高専から転勤させていただき、青春時代から人生の大半をこの鈴鹿高専図書館で過ごさせていただきました。毎日、本に触って背表紙を見て喜びを感じましたが、仕事としては随分勉強もさせていただきました。毎日の仕事は単調に地道に変わりなく積み重ねてきたと思っていましたが、振り返ってみますと図書館の目的は今も変わりませんが、業務を進める手法はコンピュータの利用でほとんど電子化され変わってしまいました。図書の貸出・返却がバーコードになり、目録カードの作成がデータ入力になり、統計を出すのも容易になり、図書の検索は瞬時に画面に現れます、夢中で仕事をしているうちに時代

の大きな波に乗っていました。

楽しいこと、苦しいこといろいろありましたが、過ぎてしまえばみんな夢のように思われます。自分の好きなことを仕事にできて本当に幸せでした。また学生の皆さんと直接接する仕事でいつも元気と若さをもらい感謝いたしております。学生さんが「こんにちは」「お疲れさま」と声を掛けてくださると疲れも忘れ、本当にこの学校にいて良かったとうれしくなりました。どうぞ社会に出られましたらご活躍されますことを心から願っております。

最後になりましたが、数々の思い出と暖かいご支援、ご指導をくださった教職員の皆様に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。そして鈴鹿高専のますますのご発展と、皆様のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

学科近況

一般科目の近況 奥 貞二 (45C卒)

2003年度は、一般学科にとって大きな変化はありませんでしたが、10年間鈴鹿高専で勤務された英語科教室の大石倫子先生が、3004.3.31を以って、静岡大学に栄転されました。代わって、大阪大学より、山口県出身の齊藤園子先生が2004.4.1より着任されました。大学院学生から直接赴任された新進気鋭の先生です。大石先生に勝るとも劣らない活躍が期待されます。早くお仕事に慣れられ、学生を引っ張って言ってくれることを期待します。

後は、鈴鹿高専にとって開学以来の大変大きな変化がありました。全学共通ですが、高専が法人化に伴い、高等専門学校機構の1ランチということになりました。実質は余り変わらないのですが、教職員の身分も、国家公務員ではなくなりました。従って、我々の呼び名も、教官ではなく、教員ということになりました。教官会議というのもなく、教職員会議となりました。後は、研究費も、毎年、1%づつ削られていくとのこと。まあ、0%になるまでに定年を迎えるのですが。親方日の丸という意識から、1法人となったので、意識改革を迫られているのです。しかし、なかなか昔の空気を吸っている気分から抜け出せないのが現状です。

皆さんにお伝えしなければならないビッグニュースは、全国高専体育大会の結果です。剣道(団体と個人・近藤温史5年)とバスケット(男・女)は全国優勝を飾りました。今年も輝かしい成績を残してくれました。また来年に向かって、優勝したクラブは来年も優勝を、そうでなかったクラブは来年こそ全国制覇を目指して、精進してください。

昨年10月に、勝山校長に代わって赴任された6代目の中根孝司校長は、北海道大学法学部出身、若さ溢れるチームリーダーという感じです。中根校長の下で、JABEE本審査を受け、見事パスし、JABEE認定校に指定されました。そして、齊藤副校長と共に、色々な分野での見直し、新しい組織作りが進行中のところ。法人化に伴い、経営主体が代わっただけでなく、良い意味での中味も大きく変わろうとしている過渡期だと思われます。卒業生の皆様におかれましても、鈴鹿に出向く機会があれば、是非、古巣の研究室を訪問され、また後輩たちに激励を送って下さるようお願いいたします。きっと、生まれ変わろうともがいている高専の姿が実感されることでしょう。

機械工学科の近況 藤松 孝裕 (62M卒)

長いトンネルを抜けているのか否か、経済省からの景気動向の発表とは異なり、実際には、厳しい社会情勢である近年、機械工学科の卒業生の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。本校でもJABEE 審査(平成15年度認定)、本年4月からの独立行政法人化と、時代の流れについていくのが大変な毎日を送っております。さて、本年度も機械工学科の近況を報告せよとのことなので、例年と同じように簡単に紹介させていただきます。

はじめに、機械工学科での人事異動ですが、長年にわたり本学科のためにご尽力いただきました西谷正教授が平成16年3月に定年退官されました。西谷教授は、本学科の教育活動に多大な貢献をされており、西谷の退官は、本学科のみならず全学職員からも惜しまれております。さらに、本年度に関しましては、非常勤講師およびアドバイザー(ボランティア)として、毎日

来校されています。後任としては、計測工学関連を専攻している埜克己教授(前 豊橋技術科学大学)が本年4月より教鞭をとられており、機械工学科の守備範囲が一段と広がったように思います。なお、来年度(平成18年3月)には、岡田修教授が定年退官される予定です。その後も非常勤講師として来校される可能性はありますが、この際にお会いしておきたい同窓生の皆様は、残りの1年半の間に来校されることをお勧めいたします。

実験室	教官名	各実験室での主な研究テーマ
精密工学	富岡 巧/白井 達也	4足歩行ロボットの歩容について柔軟関節ロボットの研究開発
加工システム	大井 司郎/打田 元美	高精密切削ホイールの製作に関する研究二物体間の接触圧力分布測定法の開発
材料力学	末次 正寛	材料の衝撃破壊挙動の直接観察・超音波の工学的利用
計測工学	埜 克己	構造物の動的応答に関する研究
設計工学	仲野 雄一	接着構造体の強度設計に関する研究
流体工学	近藤 邦和	超音波速度分布計による自由噴流に関する研究
熱工学	岡田 修/藤松 孝裕	気液二相流に関する研究単一液滴と静止液面との衝突による気液界面の変形に関する研究
振動工学	民秋 実	GFRP平板の多軸荷重下における疲労損傷に関する研究

現在在職しているスタッフおよび主な研究テーマは左記ページに示すとおりであり、その他、澤辺昭廣技官、谷川義之技官の総勢13名で機械工学科での学生指導や研究活動に取り組んでおります。また、本校には、高価な研究設備も設置されていますので、卒業生の皆様におかれ

ましては、会社での問題点等が本校に設置されている研究設備を使って解決できるようであれば、気兼ねなく一声おかけください。また、お近くにお越しの際には是非一度お立ち寄りください。

電気電子工学科の近況 奥田 一雄 (52E卒)

景気は回復傾向にあるというものの、まだまだ先の見えない厳しい社会情勢が続いていますが、電気工学科の卒業生の皆様は各方面において元気で御活躍のことと思えます。

電気工学科が電気電子工学科に改名されて2年目に入りますが、本年度も電気工学科の卒業予定者の就職状況は極めて良好で、現時点で大学進学希望者も含めてクラスの大半が進路を決定しています。これも卒業生の皆様方の努力のおかげであると改めて感謝しております。

さて、誠に残念ではありますが、本年3月末に山口先生が定年退官されました。

先生には長年にわたり本校並びに本学科の発展のために多大の御尽力をいただきました。また、クラブ活動でも音楽部の顧問として御指導いただき、先生の御人柄から本学科のみならず他学科の在校生や卒業生からも大変親しまれた存在であったことは皆さん御承知のとおりです。先生の後任には名古屋大学から柴垣先生をお迎えしました。以下に柴垣先生の自己紹介をお願いし、電気電子工学科の近況報告とさせていただきます。

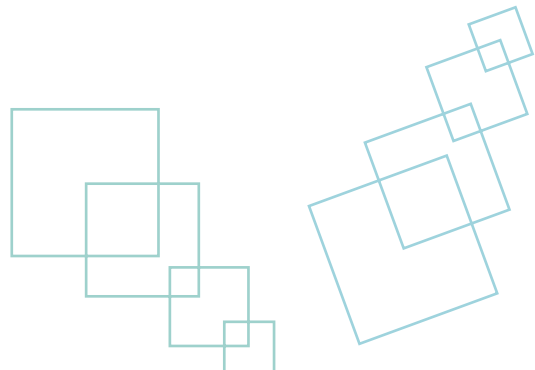
平成16年4月1日付けで電気電子工学科の助手に着任いたしました柴垣寛治です。名古屋大学大学院工学研究科電子工学専攻博士後期課程を修了後、研究員として名古屋大学に勤務し、プラズマに関する研究を続けて参りました。プラズマと聞いてその実体をイメージできる方は少ないだろうと思います。気体を放電などにより加熱すると、気体を構成する分子が原子に分かれ、さらに電子が分離してイオンができます。

このような多数の荷電粒子が混在して乱雑に動き回っている物質の状態をプラズマと呼びます。われわれの身近なところでは、プラズマディスプレイや空気清浄機などがありますが、これは応用のほんの一部に過ぎず、プラズマは眼に見えないところで広く使われています。

例えば、現在のコンピュータの心臓部である半導体集積回路は、極めて微細な配線が複雑に入り組んだ構造をしています。この製造工程で材料に微細な穴を開ける時や、配線材料を穴に埋め込む時などにプラズマが使われています。

プラズマに含まれる電子やイオンなどの粒子は大変に小さいので、超微細加工に適しています。ですから、IT産業を陰で支えているのはプラ

ズマであるといっても過言ではないでしょう。しかし、プラズマ内部の粒子は複雑な挙動を示すので、これらを制御して活用する技術が求められています。そこで私はプラズマ内部の情報を詳細に計測する技術の開発を研究のテーマとしています。鈴鹿高専に勤務して約半年、この研究テーマを学生らと共に産業応用に向けて発展させること、さらに、学生の教育指導との両立を図っていくことが目下の課題であります。教員の中では今のところ最も若く、学生と間違えられることもしばしばではありますが、高専の発展のために努力する所存です。皆様には御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



電子情報工学科の近況 長嶋 孝好 (48E卒)

卒業生の皆さまには、お元気でご活躍のことと思います。学生の就職や学外実習等では、種々お世話になり、ありがとうございます。

さて、学科の近況をお知らせしたいと思います。まず、船戸康幸先生がこの3月末をもって退官されました。先生は、平成14年度まで学科主任を勤められ、授業では「電気磁気学」等を担当されました。退官後は、非常勤講師として「電子制御工学」（5年生）を担当いただいております。

次に、田添丈博先生が博士号を取得されました。タイトルは『自然言語処理における相関表現のモデル化と応用に関する研究』です。今年度は講師に昇任され、4年生の担任として、また「ソフトウェア工学」、「情報伝送工学Ⅰ」（ともに4年生）、「マイクロコンピュータ基礎」（Z-80を利用）（2年生前期）、「プログラミング基礎」（C++を利用）（1年生後期）等の授業を担当されています。

今年度、着任された先生をご紹介します。青山俊弘先生は、理化学研究所脳総合研究センターにお勤めの後、この4月より電子情報工学科の助手として勤務されています。先生のご専門は、①神経細胞・神経回路網の電気生理実験やシミュレーション解析、②脳神経系の研究活動を支援するソフトウェアの開発です。先生は、「プログラム設計」（2年生）、「電子情報工学実験」（1・2年生）の授業を担当されています。

現在、学科主任は、昨年度より桑原裕史先生が勤めてみます。担任は、3年生は井瀬先生、4年生は田添先生、5年生は吉川先生です。また、低学年については、1年生は伊藤清先生、2年生は仲本朝基先生です。（1・2年生のクラス人数はそれぞれ54名・51名ということもあり、余裕をもって実験実習を行えるように、第1基礎実験室が拡幅されています）

技術職員の西村さん、河野さんも、忙しい日々を送っています。学生実験の準備や指導は勿論ですが、放課後や休暇中も、ソーラーカーレースやロボットコンテストの準備

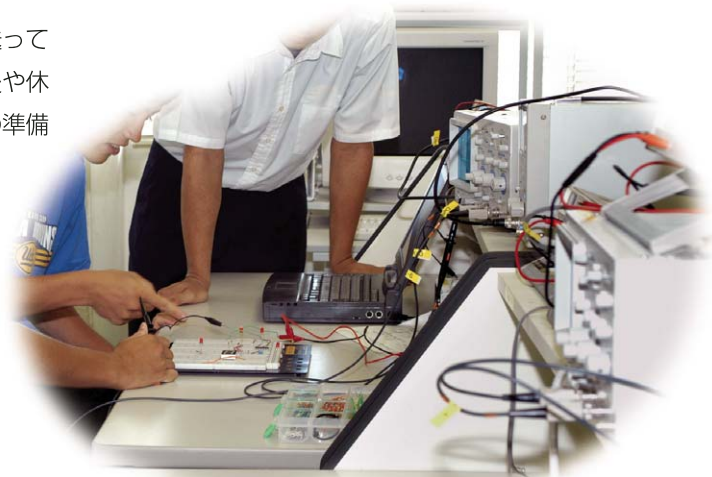
作業を指導していただいています。河野さんには、昨年度更新された情報処理実験室の新システムの管理・保守を行っていただいています。

今年度の非常勤講師の先生方をご紹介します。奥井先生には「応用数学Ⅱ」と「情報伝送工学Ⅱ」（ともに5年生）、木村先生には「画像処理工学」（5年生）、張先生には「情報数学」（5年生）、元垣内先生には「光電子工学」（5年生後期）をお願いしております。また、「電子制御工学」については、これまで長くお世話になった米澤先生から、上述のように、船戸先生に交替いただいております。

プログラミングコンテストに関してお知らせします。今年度は10月に四国の新居浜高専の主管で実施されます。課題部門では吉川先生指導によるチーム（4-I学生有志）、競技部門では箕浦先生指導によるチーム（3-I学生有志他）が参加いたします。学生諸君の健闘を期待したいと思います。

今年度の本学科の学外実習は、履修学生は26名で、お引き受けいただいた事業所は17箇所となっています。地域別には三重県（12社）、愛知県（4社）、東京都（1社）となっています。次年度も引き続き、多くの学生諸君が有意義な体験をできるように希望しています。また、就職・進学については、現時点（9月）では、就職希望者は23名、進学希望者は21名という状況です。今年は、昨年度以上に厳しい状況が続いております。

学科のホームページ（<http://www.suzuka-ct.ac.jp/info/>）においては、「卒業生の皆さまへ」などで有益な情報を提供したいと考えています。ときどき覗いていただければ幸いです。



生物応用化学科の近況 澤田 善秋 (50C卒)

～明るく活気のある学校へ是非、お越しく下さい～

本年度は独立行政法人化、JABEE（日本技術者教育認定機構）認定と環境が変わりつつありますが、就職、編入学も順調に決まり、また全国高専大会での活躍も華々しく、学校内は明るく活気づいています。一方で生物応用化学科では、開校以来、本校の発展に尽くしてこられたベテランの先生方がここ2～3年の間に続々と定年を迎えられる時期に差しかかっています。懐かしい先生方のお見えになる間に、卒業生のみなさんの元気な顔を見せに来ていただければ喜ばれるかと思えます。ここで、本学科各スタッフからの一言を紹介します。

坂西勝正教授：過去3年間「学生のために」を旗印に学科の改善を皆で進めて来ました。残り少ない期間を元気に励みたいと思います。

松田正徳教授（学科主任）：アベペースを守り、教育、研究に従事。生物応用化学科の1回生の3、4年担任、バドミントン部顧問、実に楽しい。

富澤好太郎教授（寮務主事）：毎年、新しい学生に接し、学生と共に、楽しく優しく？授業や卒業研究に取り組んでいます。

杉山利章教授：今年の上陸台風が本日で6つに、昨日終了したギリシャオリンピックでは16個の金が、赴任以来この学校で送り出した卒業生は26回で、もちろん、いつまでも記憶に残るのは、一番最後。皆さんの精進を楽しみにしています。

内藤幸雄教授：生物応用化学科の一員として、授業や卒業研究に取り組んでいます。外部資金導入の一環として、平成15年度から植物由来の糖尿病予防特定保健食品の開発を始めました。

生貝初教授：教育と研究、いずれも成果を出さねばならない大変な時代になってきました。教育の方では今年から専攻科の担当になりました。専攻科の学生は結構自立していると思いますが、世間から見ればまだまだです。自立する学生を育てるのが今年の私の課題です。研究面では、企業、鈴鹿市、三重県、経産省を巻き込んだ研究（2件）と学内、高専、大学との共同研究（3件）が本格的に走り出しました。玉砕せぬよう頑張ります。

岩田政司助教授（工業化学科S50年卒、化学工学担当）：母校の教員として12年目を迎えます。化学工学系科目を担当されていた高橋先生が退官され、後任として三菱化学から同期の澤田先生が赴任され、9期生が本校の化学工学教育に責任を持つことになりました。2人で力を合わせて頑張りたいと思います。井上先生の報告にありますように、本年5月に、日本技術者教育認定機構（JABEE）から学科4・5年と専攻科1・2年を合わせた「複合型生産システム工学」教育プログラムが認定を受けました。これからも、鈴鹿高専の教育の質を高め、内容を充実させ

ることに力を注ぎたいと思います。

澤田善秋助教授：本年4月に高橋先生の後任として赴任しました。昭和50年に工業化学科を卒業後、29年間の企業勤めをやめて母校の教壇に立つことになりました。岩田先生と同期2人で化学工学分野を担当させていただきます。長年の企業経験者として、社会で活躍できるエンジニアの育成につとめてまいります。

長原滋助教授：今年度は5年生の担任を担当しています。以前は学科主任が5年生の担任も兼務していましたが、数年前から担任を置いて業務分担するようになりました。無事全員が卒業できるように成績や出欠などに目を配っています。

下野晃助教授：卒業生の皆さんお元気でご活躍のことと存じます。古き良き伝統を保ちながらもますます元気で活気のある学校にしてゆけるよう学生と一緒にがんばっていきます。

中山浩伸講師：昨年2003年4月に外資の製薬会社からここ来ました。分子生物学を基盤に研究を行っています。自分で考え、その場の状況にあった行動を積極的にとれる自律・自立性を持つ人材が育つようがんばっていきます。

淀谷真也助手：2003年に着任し、あっという間に一年半が経ちました。高分子材料（生体材料）を研究しようと、地道に準備しているところです。今年は卒研生も二人配属され、徐々に研究室らしくなってきました。クラブにおいてもなんとか時間を作り、部員のみならず汗を流しています。

高専の先生は研究、教育、クラブと大変ですが、頑張っていこうと思います。

堀井一夫技術専門職員：生物応用化学科を卒業されたみなさんは社会、学校で頑張っていると思います。本校も生物系と化学系の2本立てとなり変化に富んできました。私も百姓（植物相手）を楽しんでいます。また、各先生の顔を見に来て下さい。

伊東真由美技術専門職員：2000年4月より生物応用化学科の技術職員を務めています。仕事を楽しむ余裕を持ちたいと思う毎日です。

材料工学科の近況 南部 智憲 (2H卒)

材料工学科におけるこの一年間の活動内容を皆様にご紹介させていただきます。平成16年度より、国立大学と同様に鈴鹿高専も独立行政法人として新たなスタートを切りました。また日本技術者教育認定機構（JABEE）によって本校の教育プログラムが正式に認定されることとなりました。これを機に材料工学科の先生方も大変良い方向へ意識改革が進んでいるように思います。特に材料工学科は地域に目を向けた改革が進んだ一年であったと思います。

まずは教育関係についてですが、昨年度より学内の教育のみならず地域の教育にも力を注ぐようになりました。例えば、近隣の小学校へ出向いて私たちが理科の授業を行いました。これを『出前授業』と称し、ちょっとだけ工夫を凝らした理科の実験を行い、小学生に科学・工学への興味を持ってもらおうという試みです。昨年度は津市の養正小学校へ出向き、熱膨張に関する実験を行いました。生徒達は誰一人として退屈そうに実験をしている子が見受けられず、全員興味津々に実験をしておりました。またこちらの問いかけには皆が手を挙げて答えようとする姿勢など、本当に理科離れが起きているのだろうかという疑問に思うほどでした。あの生徒達の姿勢をぜひ鈴鹿高専の学生にも見てもらい、もう一度初心を思い出して欲しいと強く感じました。本年度は同じく津市の高野尾小学校と片田小学校での授業を計画しております。もしかすると、卒業生の方々のお子様が生徒さんとしてお見えになるかもしれません。その時にはぜひお子様から授業の感想を伺い、私どもに授業の評価をお寄せください。

次に研究関係についてですが、鈴鹿高専では数年前より校長裁量経費というシステムがあります。これは一年間の研究計画書を提出し、その内容を審査して研究経費の配分が決定されるというシステムです。従来は校長先生が中心となって経費配分を決定しておりましたが、本年度より外部の有識者による審査が行われ、優秀な教育研究テーマに重点的に経費を配分する『プロジェクト研究』と称する経費申請制度が新たに設けられました。本年度は9件のプロジェクト研究が採択されましたが、特筆すべきことは材料工学科の先生方が申請されたプロジェクト研究が4件も採択されているということです。これは先生方の教育研究テーマが学外のニーズに応えるとともに、大変レベルの高い研究テーマであることが学外に広く認められたことを意味しています。この事実は材料工学科にとって大いに誇られるべきことであり、材料工学科の学生にとっても励みになることだと思います。

最後に共同研究推進センター分析室の設備更新について紹介させていただきます。材料の表面分析に欠かすことができないX線光電子分光分析装置（ESCA）が更新されました。ESCAを使用した卒業生の方には、真空がなかなか引けず、実験が深夜におよんで苦勞をされた良き思い出があることと思います。新しいESCAはULVAC製の最新鋭の分析装置であり、分析性能が飛躍的に向上するとともに、PC制御のおかげで扱いが大変便利になったと伺っております。部屋に入ってその姿を見ただけで、高性能が理解できることでしょうか。最近の産学交流事業の促進や様々な場面での宣伝活動の甲斐あってか、周辺企業の方々によるSEM/EDX、蛍光X線分析装置、X線光電子分光分析装置等の需要が大変高まってまいりました。筆者も何件かの分析依頼を承りましたが、具体的に問題解決に繋がった事例もあり、共同研究推進センター分析室が産学連携に大いに貢献した一年であったと思います。これら装置による分析を必要としており、まだ利用されていない卒業生の方々もぜひ一度ご利用ください。

このように、地域を意識した改革が進んだ一年でありましたが、結果として材料工学科は学内でも活気のある学科の一つであり、常にリーダーシップを発揮する学科になりつつあると思います。今後の材料工学科にご期待ください。



三重県内初!

鈴鹿高専の教育が JABEE から認定される!!

平成15年度に申請した技術者教育プログラムが日本技術者教育認定機構(JABEE)から県内初の認定を受けました。



■JABEEから交付されたプログラム認定証

1 認定申請の経緯

鈴鹿高専では、国際的に活躍できる創造性豊かな実践的技術者の養成を目指す必要があると考え、平成12年度から準備を進め、平成15年4月に日本技術者教育認定機構(JABEE)における技術者教育プログラムの認定申請を行いました。同年11月にJABEEの訪問審査が行われ、平成16年5月10日に、鈴鹿高専の「複合型生産システム工学」プログラムが認定を受けました。

JABEEから認定を受けた三重県内の高等教育機関の技術者教育プログラムは、本校が最初です。

2 認定プログラムの内容

認定を受けた「複合型生産システム工学」プログラムは、学科4、5年及び専攻科1、2年にかかる4年間で学習する技術者教育プログラムであり、工学(融合複合・新領域)関連分野で審査を受けました。

本プログラムは、高専教育の特徴である早期7年一貫教育により、主となる専門分野(機械、電気・電子・情報、化学、生物、材料)に加えて、中京地区の伝統的特徴である「ものづくり」に必要な生産システムに関する工学基礎知識と、豊富な実験技術を身に付けた国際的に活躍できる実践的技術者の育成を目指すものです。

このプログラム履修学生は、次のような姿勢・知識・能力を身に付ける必要があります。

技術者としての姿勢
・・・視野、技術者倫理、意欲

基礎・専門の知識とその応用力
・・・基礎、専門、展開

コミュニケーション能力
・・・発表、英語

3 認定の効果

JABEEから教育プログラムの認定を受けたことにより、今後JABEEの認定基準に従い、教育方法、教育組織、教育環境、教育改善システム等の教育内容、水準の継続的な維持・改善等を実施していくこととなります。

文部科学大臣が指定する認定教育課程(JABEE認定の技術者教育プログラム)の修了者は、技術者に必要な基礎教育を完了したものと見なされ、技術士第一次試験を免除されて直接「修習技術者」として実務修習に入ることができるようになります。

4 日本技術者教育認定機構 (JABEE) とは?

日本技術者教育認定機構 (Japan Accreditation Board For Engineering Education / 設立1999年11月19日) は、文部科学省、経済産業省などの政府機関並びに経団連をはじめとする産業界の支援を得て、技術系学協会と密接に連携しながら活動する非政府団体です。

JABEEの目的は、統一的基準に基づいて理工農学系大学における技術者教育プログラムの認定を行い、教育の質を高めることを通じて、我が国の技術者教育の国際的な同等性を確保することです。

JABEEの認定制度は、大学等の高等教育機関で実施されている技術者教育プログラムが、社会の要求水準を満たしているかどうかを公平に評価し、要求水準を満たしている教育プログラムを認定する専門認定 (Professional Accreditation) 制度であり、我が国を代表する技術者教育認定団体としてワシントンアコード (協定) に加盟し、技術者教育の国際同等性を確保することを目的の一つに掲げています。



『校友』制度発足

今年度から、本校職員で通算20年以上勤務し、本校に多大なる貢献をされた方々に対して校友の称号を授与する校友制度が制定されました。それにもとづき、5月19日(水)に校友顕彰記授与式が挙行されました。授与式後、記念撮影、懇談会が行われ、懇談会では、和やかな雰囲気では話が弾んでいました。今回授与されました旧職員の皆様は、下記の方々です。



- | | | | |
|--------|--------|--------|-------|
| 伊藤 正治 | 坂井 妙 | 田中 右治 | 中林 壽生 |
| 長谷川 寿子 | 一見 清 | 米倉 房吉 | 山崎 治憲 |
| 山中 孝吉 | 浅野 きよ子 | 加藤 猛 | 服部 芳武 |
| 松浦 正男 | 野呂 正雄 | 横井 一利 | 安岡 弘道 |
| 大河内 新子 | 藤井 三郎 | 黒田 和美 | 松浦 幸代 |
| 小野 不二雄 | 鈴木 軍治 | 大井 和子 | 鈴木 満子 |
| 中村 清四郎 | 豊田 嘉信 | 横山 雅子 | 南部 佳代 |
| 瀬川 勉 | 大谷 みち子 | 吉川 佐賀子 | 森 敏雄 |

同窓生の
皆様

SHTN

に参加してみませんか？

SHTNって何？

SHTNは鈴鹿高専ヒューマン&テクノロジー・ネットワークの略称です。同窓生を中心として有志が集まり、技術交流や情報交換を目的に設立されました。会員は鈴鹿高専に（学生として）在籍した者や教職員などとなっています。

いつ頃からあるの？

平成12年10月14日に第1回の総会・技術交流会・懇親会が行われています。その後、年1回の総会と年2回の技術交流会を定期的に行っています（奇数回目の技術交流会はSHTN単独開催、偶数回目はSUZUKA産学官交流会と共催）。今年は第5回総会と第9回及び10回技術交流会を開催する予定です。

技術交流会ではどんなことをするの？

卒業生の中で、企業で責任あるポストに就いてみえる方、自ら起業され経営に携わっておられる方、技術開発の中心で活躍されておられる方々に講演を依頼し、お話を伺います。また、学内からも技術シーズの話題を講演する場合があります。

参加のお願い

第1回総会・技術交流会は70名程の参加がありました。最近若干参加者が減少傾向です。会費は現在集めていません。ですから、同窓生の方は積極的に参加をしていただくと会を盛り上げて欲しいのです。

第10回技術交流会は平成17年3月8日（火）の予定です。参加希望の方あるいは詳しいことを知りたい方は電気電子工学科の近藤一之までご連絡下さい。

e-mailアドレス

kondo@elec.suzuka-ct.ac.jp



■左の写真は第1回総会・技術交流会で勢揃いした参加者の皆さん（1号館と2号館の渡り廊下より撮影）

平成15年度 青峰同窓会 会計報告

収入の部

摘要	金額(円)
平成14年度からの繰越金	37,810,960
平成14年度卒業生入会金・終身会費	2,123,000
過去の卒業生入会金	10,895
預金利息	4,874
合計	39,949,729

支出の部

摘要	金額(円)
会報発行経費	878,648
事務費	17,115
次年度への繰越金	39,053,966
合計	39,949,729

平成16年度 青峰同窓会 会計予算(案)

収入の部

摘要	金額(円)
平成15年度からの繰越金	39,053,966
平成15年度卒業生入会金・終身会費(205名)	2,255,000
合計	41,308,966

支出の部

摘要	金額(円)
総会、理事会等の会議費	50,000
会報発行経費	1,000,000
事務費	50,000
次年度への繰越金	40,208,966
合計	41,308,966

編集後記

気象では夏の猛暑、あいつぐ台風上陸、社会では大企業の不祥事や事故と、今年も大きなニュースが途絶えることがありませんね。その中で高専もいよいよ法人化され、新しい歴史を踏み出しました。大変厳しい社会情勢の中での船出ですので、卒業生の皆様のご協力無しには、鈴鹿高専を大海に向けて進めて行くことはできません。皆様のご理解および協力が何よりの力となりますので、よろしくお願い申し上げます。



まずは学校へお立ち寄りいただき、学校の最近の様子をご覧いただければと思っております。
(北村 登 47E卒)

誌名 青峰同窓会会報
発行日 2004年11月
発行 国立鈴鹿工業高等専門学校
青峰同窓会 広報委員会
〒510-0294 鈴鹿市白子町
☎0593-86-1031(代)
E-mail/almn@suzuka-ct.ac.jp

ホームページアドレス

<http://www.suzuka-ct.ac.jp/~almn/>